

---

---

「もの」の人類学的研究—もの、身体、環境のダイナミクス（2008年度第3回）

日時：2008年10月25日（土） 午後1時半より午後5時45分まで

場所：AA研マルチメディア会議室(304)

報告：

1) 印東道子（AA研共同研究員、国立民族学博物館）

「もの・身体・環境：オセアニアの土器作りの動態的復元」

2) 窪田幸子（AA研共同研究員、広島大学）

「ミュージアムとフェティシズム—「もの」の秘匿と開示をめぐる交渉と抵抗」

---

---

ミュージアムとフェティシズム—「もの」の秘匿と開示をめぐる交渉と抵抗

窪田幸子（広島大学）

本発表では、「もの」の開示と秘匿という態度の違いにこだわり、フェティシズム的な「もの」とのかかわりを考えた。おもに博物館という場面でおきている先住民との関係性の変化に注目し、カナダとオーストラリアの事例について比較検討を行い、二つの地域での博物館と先住民の関係の変化を、開示と秘匿という、フェティシズムに通じる概念にこだわりつつ、考察する。オーストラリア、カナダの双方において20世紀末から21世紀はじめにかけておこった主流博物館の変化と地域／部族博物館の動きについて、文献および聞き取り調査を行ったが、その内容について紹介した。主流博物館での展示がえ、先住民の展示への参加、そして、地域博物館の設立、などの動きが見られた。クリフォードはこれらの動きを、先住民による主流社会の博物館文化のゆさぶりとして評価したが、オーストラリアのケースではかならずしもそうとはいえなかった。両者の動きは重なりを見せると同時に、双方の地域的社会的事情の違いが影響を及ぼしていることもわかった。そしてそこにみられる対応の差には、主流社会の人々とローカルな人々の、モノをめぐる概念や、博物館という制度に対する考え方の差があらわれており、モノを秘匿するという、ローカルな現場でのフェティシズム的な態度と、開示するという博物館的態度の間の齟齬が見られるのであることを指摘する。

カナダとオーストラリア双方の主流博物館と部族博物館にみられた近年の変化と現在についてそれぞれ整理して述べ、次にその違いについて比較考察から、モノとフェティシズムの関係について考察を導く。博物館に蒐集され展示されるモノと、地域的な文脈において意味を持つモノとの相克を考えることで、これまでのモノについての視線について、フェティシズムをキー概念に再考をこころみた。

印東道子（国立民族学博物館）

土器は、身体技法と環境にもっとも密接に関わっている「もの」である。土器作りにおいて欠かせない粘土は、土が長い時間をかけて風化したものであり、堆積ごとにその鉱物構成は多様である。素材、技術、プロダクツ(土器)の関係を分析するには、どれか一つの変数値を下げるができる環境での研究が重要である。そこで、地質構造が比較的均一で、代替資源が利用できない島嶼環境における土器作りを分析し、土器の変化が環境への技術適応として解明できることと、土器作りを継続する文化・社会的メカニズムの存在を見てゆく。

ミクロネシア・ヤップ島の土器作りは、2000年の歴史をもつ。この島に拡散居住した初期の人間集団は、海岸の砂を混ぜた「CST 土器」を作っていた。その後、砂の混入は少なくなり、胎土に砂を混ぜない「無紋土器」が作られ、今から500年前には断面が層状を示す特異な「層状土器」が作られはじめた。他の物質文化にはほとんど変化がないことから判断すると、外部からの文化的影響で土器が変化したのではなく、「粘性の非常に高い粘土を使ってどのように土器を作るか」という試行錯誤の末の変化であると考えられる。以下は、2000年をかけたヤップの土器技術の変化様態である。

ヤップで利用できる粘土は、モンモリロナイトという粘土鉱物を多く含むため粘性に富み、収縮率が高い。これを使って土器を作るのには様々な技術的な工夫が必要とされる。初期に作られた CST 土器は、ヤップに拡散してきた人々が拡散前に用いた身体技法を適用して作ったと考えられ、粘土には海岸の砂が混ぜられた。しかし、ヤップの海岸の砂には高熱に弱い貝や珊瑚起源の炭酸カルシウム砂が混じっており、火山島の砂を混ぜて作る場合に比べると火力コントロールが難しい。遅れて出現する無紋土器の形質的特徴は多様性が大きく、砂の割合を変えたり、厚さを変えたりなど、さまざまな技術的試行錯誤が見て取れる。これら二つの土器が作られなくなるとほぼ同時に出現したのが、最終的にヤップ全域で作られるようになった層状土器であった。この特異な形態的特徴を持つ土器の製作技法は、印東が記録することのできた伝統的土器作りに一致し、移住したヤップの環境条件に技術を適応させた結果のプロダクトとして見なすことができる。

ヤップ島の伝統的な土器作りの特徴は以下のようなものである。

- 1) 粘性の高い粘土しか利用できないにもかかわらず、砂を混ぜるなど粘性を下げる努力をしない。
- 2) 土器の成形過程に2週間以上をかける。
- 3) 3~4ヶ月という非常に長期間の乾燥期間を設ける。

- 4) 焼成直前に土器の内外面を濡らすことで、土器を予熱せずいきなり 600 度以上の火の上に置いても割れない工夫をしている。
- 5) このときに内外面から発する水蒸気の圧力が土器の器壁内に層状の間隙を生じる。
- 6) 完成した土器は、砂が混入されていないため、強度が高く、熱衝撃にも強い。

この一連の工程は、完成までに要する時間が世界の土器作りの中でも非常に長い。これほどエネルギーと時間効率の悪い土器作りが、オセアニアの他の島（例えばサモア）のように放棄されなかった背景には、伝統的ヤップ社会において土器に付与されていた文化・社会的価値の高さが、継続への圧として作用していたと考えられる。

すなわち、ヤップの土器は最下層の村の女性によって作られ、生産物は直接支配を受ける高位の村に全て貢納された。土器はさらに他の中間階層の村落やヤップ周辺の島々へと再分配される。つまり、土器生産は、生産者ではなく土器の貢納先である上位社会集団によってコントロールされていたため、これほど効率の悪い土器作りにもかかわらず、継続して生産されてきたと考えられる。

ヤップの事例を元に、土器・身体技法の変化・環境・文化の関係を図式化すると下の図のように表すことができる。

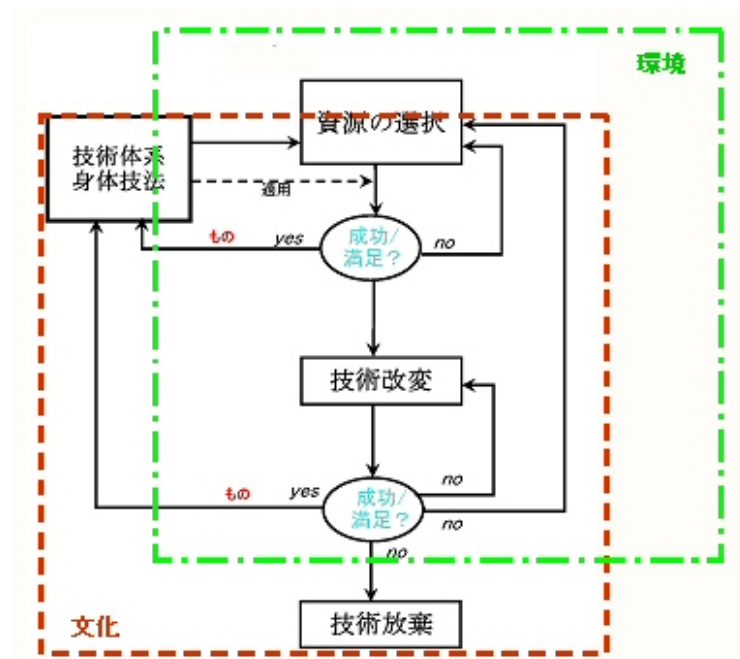


図 土器の身体技法の変化をめぐる文化と環境の模式図